

IL-1 α \cong INF γ \cong IL-8, ケモキネシス作用では TNF β > TNF α の順で有意な活性を示した. 一方, IL-2, MCP-1, NAP-2 および RANTES はケモタキシスおよびケモキネシス作用を示さず, MIP-1 α はケモアンチキネシス作用を認めた.

4 LMT-chamber の臨床的検討

— 薬剤過敏症患者における有用性の検討 —

八木 元広・宇野 勝次・小池 由博
齋藤 幹央・阿部 学・古川 智康
国保水原郷病院薬剤科

【目的】薬剤アレルギー起因薬剤同定法である白血球遊走試験 (LMT) の遊走試験を chamber 法へ変更し, 薬剤過敏症疑診患者についての有用性を検討した.

【方法】薬剤過敏症疑診患者 25 例 (男 13 例, 女 12 例) に対し LMT-平板法と chamber 法の両試験を行い比較した. また, 薬剤過敏症疑診患者 114 例 (男 57 例, 女 57 例) に対し LMT-chamber を行い過敏症状, 被疑薬剤について検討した.

【結果】平板法と chamber 法との一致率は 89.8%, 陽性率は平板法 64.0%, chamber 法 76.0% であった. 114 例の陽性率は 78.9% で, 患者血清添加群が無添加群に比べ有意 ($p < 0.001$) に高く, 白血球遊走促進因子の検出が同阻止因子より有意 ($p < 0.001$) に高かった. 過敏症状別の陽性率は皮疹 83.6%, 肝機能障害 73.9%, ショック症状でも 84.6% と高く, その他の症状も同程度であった. 被疑薬剤全体で 27.1% の検出率を示し, 被疑薬剤別でも同程度の検出率を示した.

5 血液から分離された緑膿菌の薬剤感受性の推移

尾崎 京子・高野 操

新潟大学医学部附属病院検査部

当院における緑膿菌の血液培養からの分離は, 1990 年代以降年間数例と必ずしも多くはないが, 近年緑膿菌の多剤耐性化が問題になってきている. 今回我々は, 全国 PER2001 研究会において当院分離の主に血液・髄液由来緑膿菌の薬剤感受性

について検討した. 検討株は 1991 年～1995 年 (前期) が 33 株, 1996 年～2001 年 (後期) が 39 株, 2001 年に分離された血液以外の 96 株 (2001 年株) の合計 168 株で, 3 者を比較した. 測定薬剤はセフェム系 6 剤, カルバペネム系 4 剤, アミノグリコシド系 3 剤, キノロン系 2 剤など 18 剤である.

結果は, 累積百分率でみた場合, いずれの系統の薬剤においても血液後期株は前期株より抗菌力の低下がみられた. 2001 年由来株は両者の中間だった. メタロ β -ラクタマーゼ産生株, 多剤耐性株 (IPM, GM, CFX) は血液後期由来に 6 株, 2001 年由来に 4 株検出され, これらはすべて各系統のいずれの薬剤にも高い MIC を示した. 当院 168 株と全国 3,774 株を MIC₅₀, 80, 90 で比較したところ, TOB を除きほとんど差はみられなかった. MIC₅₀ で良好な薬剤は, CFX > MEPM > BIPM・TOB・LVFX で, MIC₉₀ では TOB (全国) > GM (全国)・MEPM だった. 緑膿菌は血液由来株でもメタロ産生株や多剤耐性株が検出され, 感受性が低下してきている. 今後, 院内感染防止など十分な注意が必要である.

6 小児マイコプラズマ肺炎に対する治療の検討

大石 智洋・五十嵐幸絵

新潟県厚生連上越総合病院小児科

【目的】今年流行している小児マイコプラズマ肺炎に対する治療を検討した.

【方法】2002 年 6 月より 2003 年 5 月までに, 胸部レントゲン所見で肺炎像を認め, 血清マイコプラズマ抗体価がペア血清で 4 倍以上上昇した 27 名を対象とした. AZM 10mg/kg/日, 1 日 1 回 3 日間内服した群を A 群, RKM 30mg/kg/日, 1 日 3 回 10 日間内服した群を R 群とした.

【結果および考察】A 群 16 例 (入院 10 例, 外来 6 例) と R 群 11 例 (全入院例) において, それぞれ平均年齢が 7.0 歳, 2.7 歳, 治療開始日の平均は 4.5 日, 4.6 日, 治療開始後の解熱日数は平均 1.5 日 (1～3 日), 平均 1.6 日 (1～4 日), 治療開始後 3 日目の咳嗽は改善が 75%, 73% だった.

いずれの群も無効例や再燃例はなく、両群とも同等の臨床効果であった。

なお、今回A群とR群で年齢層に差を認めた理由は、AZMの細粒に対する服薬コンプライアンスが悪いためと考えられた。

7 ビアペネムが著効した呼吸不全を伴う重症肺炎の1例

出雲 雄大・木口 俊郎・山口美沙子
立川総合病院呼吸器内科

患者は80歳女性。主訴は呼吸困難。現病歴は2002年10月13日頃から呼吸困難、歩行困難となり、当院内科外来を受診。胸部レントゲン上、両側の浸潤影を指摘され当科紹介、入院となった。両側肺野の広範な浸潤影、白血球数20,200、CRP 42.9、ESR 42.9と高度炎症反応を認め、動脈血液ガス分析ではPCO₂ 47.5、PO₂ 40.9とⅡ型呼吸不全であり、入院当日よりビアペネム0.6g/日、フルコナゾール200mg/日、メチルプレドニゾロンナトリウム40mg/日を投与した。第3病日には白血球14,800/μL、CRP 19.2 μg/dLと改善したため第8病日まで投与し、第14病日にはCRP 0.3 μg/dLと正常化し、第15病日に軽快退院となった。喀痰培養でKlebsiella, Enterobacterが検出され起炎菌と考えられた。重症肺炎においてはビアペネムのような広域の強力な抗菌薬を速やかに使用することが救命、治癒につながると考えられた。

8 気管切開症例における緑膿菌に関する検討

櫻井 賢・小野 徹・大竹 一平
戸谷 収二・金子 恭士・又賀 泉
日本歯科大学新潟歯学部口腔外科学
第2講座

1993年4月～2003年3月の10年間に日本歯科大学新潟歯学部附属病院第2口腔外科へ受診した口腔悪性腫瘍患者277例のうち、気管切開を施行した62症例を対象に検討を行い、そのうち気管切開部における細菌検査を施行し、緑膿菌が検出率された15症例について検討を行った。気管

カニューレ装着期間は、平均58.8日と長期に渡るものが多く認められた。薬剤感受性試験の結果、IPMにおいて感受性を示すものと耐性を示すものがあった。また、IPMで感受性を示すものの中においてLMOXで感受性を示すものと中等度耐性を示すものとの傾向は大きく3つのタイプに分けられた。緑膿菌の抗菌薬に対する感受性は年次経過により変化し、薬剤感受性低下を示す抗菌薬が増加している傾向にあった。緑膿菌の薬剤耐性は臨床で使用される抗菌薬の種類と投与期間に影響される可能性があるため慎重な投与が必要であると考えられた。

9 Moraxella catarrhalis が起因菌となり、重症化を来した肺炎の1例

西堀 武明・河辺 昌哲・中山 秀章
塚田 弘樹・下条 文武
新潟大学大学院医歯学総合研究科
(第二内科)

症例は、78歳の男性。以前より心房細動と慢性肺気腫を指摘されていた。平成15年2月3日に呼吸困難も出現し、救急車で当院内科外来を受診し、低酸素血症も認め、当科に緊急入院した。右上肺野に最も強く、両側下肺野にも広がる浸潤影を呈し、急速に進行した両側の肺炎と診断した。喀痰検査ではグラム陰性球菌が好中球に貪食している像が認められ、培養でもMoraxella catarrhalisが同定された。人工呼吸管理となったが、カルバペネム系を主体とした抗菌薬治療で改善した。Moraxella catarrhalisはIgAプロテアーゼを産生しないため菌の粘膜内侵入が困難となっているため、軽症例が多い傾向があるとされているが、本症例のように心肺に基礎疾患を持つ場合は重症化する場合もあり注意が必要である。